

## (4. 共同研究班活動報告)

## 4-2. 現代でも BL はファンタジーとして消費されているのか

袁 曉君

## 1 はじめに

BL (ボーイズラブ) とは、男性同士の恋愛と性関係を描いた少女恋愛ジャンルであり、漫画とアニメに限らず、小説、ドラマ、ゲームなどポピュラー文化の重要なコンテンツである。McLelland と Welker (2015) は、男性同士の恋愛や性関係を巡る BL のストーリーに焦点を当て、主人公二人は同性愛者ではないことを明らかにしている。つまり、BL はゲイ漫画ではないということになる。このジャンルのファンは、主に「腐女子」と呼ばれる異性愛の女性だが、実際には異性愛の男性や同性愛の男性・女性も読んでいる。筆者は 13 歳から BL の愛好者であり、大学においては「香港における BL 漫画の受容」についての考察に取り組んだが、この考察は 2012 年に行ったものであり、その時点から 8 年が経っているため、その期間に新たな現象が起こっている可能性があると思い、今回「香港における日本ポピュラー文化共同研究会」を行うにあたり再度整理を行い発表を行った。先行研究では、BL は異性愛女性が家父長制の現実社会から逃避するために作られたファンタジーと批判されている (McLelland and Welker 2015) が、本稿において筆者は BL がファンタジーにすぎないのかどうかを問いたい。本稿では、まず BL のファンタジー的要素を分析し、その上で BL の新しい現象についての仮説を提示したい。

## 2 BL は異性愛女性の「ユートピア」

BL の最大の特徴は、男性の身体を持つ美形の登場人物が恋愛する点である。言い換えれば、彼らの恋愛関係からは「生殖」という要素が取り除かれており、異性愛の女性が家父長制における子作りの圧力を感じなくてすむわけである。また、BL の男性主人公たちのキャラクターは 2 種類に分類される。それは、セックスにおいて挿入する側の「攻め」と挿入される側の「受け」だ。つまり、異性愛関係の位置に置き換えると、「男性」が攻めであり、「女性」が受けとなる。現実社会において従属的な位置にある女性は、受け側の男性に共感し BL を楽しんでいる。つまり、自分の好み男性との恋愛とセックスを妄想していると考えられる。しかし、異性愛女性は BL の受けだけではなく、支配的な位置としての攻めにも共感している。つまり BL の読者である女性は、受けと攻め両方の位置を自由に移動できるのである。この点から読者は性別の流動性を楽しんでいると考えられる。

前述のように、美少年の主人公は身体的には男性というジェンダー役割を設けられている

が、精神的には女性のようなふるまいが再現されているというわけだ。「雌雄同体」(McLelland 2010) と呼ばれるが、実際 BL のキャラクターが「脱性別化」していると言えるだろう。すなわち、異性愛女性は、現実社会の性別の制限なしで自分の欲望を満たすために、BL においては男性を平等な位置において見ていると考えられている。

なぜこのような BL に対する妄想が日本において異性愛女性の間に起こるのだろうか。この点については、日本のコンテキストを踏まえた分析をする必要がある。家父長制の影響がある日本社会では、性別による規範によって、女性は結婚や子作り、家族を世話するという現実に向き合わなければならない。したがって、異性愛女性の読者は、このような男性同性愛のラブストーリーに自分を当てはめた場合、理想の男性像を探すだけではなく、ある意味では現実社会の性別規範から逸脱することが明らかになっている (McLelland 2010)。そこでは、日本における BL が「女性たちが女性として自分たちの現実から逃避して、自由自在にラブとセックスを楽しむための物語群」(溝口 2015 : 254) となっていることがわかる。

### 3 BL は現実に立ち向かう文化商品

前述のように、BL は異性愛女性が男性の恋愛を通じて現実社会の圧力から逃げることが分かった。だが、男性同士のファンタジー (漫画) を読む機会が多ければ多いほど、自身が LGBT に関する問題に関心を持つ可能性があると考えられる。以下では、BL が国境を越えることで、他国においてどのような BL の意味を再構築するのか、また現地の社会における性別規範に対する抵抗の力になるのかを明らかにしたい。筆者はこれまで、BL について香港の若者に対する影響を考察する上で、長年 BL を読む異性愛女性の H 氏と出会った。H 氏のインタビューの内容を検討することで、BL に関する新しい変化を見ることができるのではないかと考える。

#### 3.1 BL と LGBT

H 氏は、香港の伝統的家庭に育ち、女性にとっては家庭と子供が大事なものと両親から教えられたと話した。「このような環境において、最初 BL に触れたのは『カードキャプターさくら』という魔法少女のアニメであり、主人公の兄木之本桃矢と親友雪兎の間に恋愛ではないが、二人の間に不思議な感情があり、そこにキュンとした。これをきっかけに、様々な BL 漫画を読んだり、アニメを見たりした」と話した。そこで、H 氏は、BL をたくさん読んでいるが、自分が内面化していた伝統的な認識と異なる男性の同性間における感情について疑問を持ち、そこからネットで色々調べ LGBT のことを認識した。すなわち、BL というポピュラー文化の衝撃を受けることによって、H 氏がこれまで保持してきた信念が揺らぐこととなった。それ以降、H 氏はますます LGBT の現状に関心を持つようになり、性的マイノリティの友達を作り、毎年香港のレインボープライドという LGBT イベントに参加している。

しかし、香港において、LGBT は既存の家族観を踏みにじるものと考えられており、性的マ

イノリティへの差別や偏見があり、伝統的な性別観念がまだ根強い状況である。性的差別禁止法（《性傾向岐視條例》）や同性結婚を認めない社会において、H氏は積極的に声を上げ、LGBTの権利を求めるための社会運動にも関わっている。

そこで、香港以外に目を向けると、例えばワン・ベイティ（2019）は、台湾のBLファンの一部の人々が同性婚合法化運動を積極的に支持していることを指摘した。また、ギタ・ブラムディタ・プラメスワリによると、「インドネシアのBLファンの一部もまた、自らのファン・アイデンティティをLGBTコミュニティ支持のための実際のアクティビズムと結合することを望んでいる」（プラメスワリ 2019: 283）と述べており、アジアの他の国でも、異性愛女性のファンタジーとして認識されているBLが、現実社会にも強く関わっている可能性があることを明らかにした。

### 3.2 日本のドラマにおけるBLへの注目

近年のBLにとっての大きな変化とは、日本のドラマが積極的にBL要素を消費している点である。四人の男性同士の恋愛模様をめぐるテレビドラマ『おっさんずラブ』や、ツイートにおいて「#ワタサク」（ゲイカップルの役名「渉」と「朔」の略称）が盛り上がったドラマ『隣の家族は青く見える』や、男性同性愛カップルの日常生活を描いたドラマ『きのう何食べた』など、BLに関わるドラマが大ヒットした。このドラマではBLの「キュン」（イチヤイチャ表現）の要素が様々な場面で見られたが、現在LGBTの人々が抱える問題が多く描かれた。例えば、周り人からの偏見や、両親へのカミングアウトの困難や、制度上は結婚が認められないといった問題がドラマでも扱われた。その点について、藤本は「BLはかつては『性愛』に力点を置かれていた。いまでもそれは基本的には変わっていないが、『おっさんずラブ』にせよ、『きのう何食べた？』にせよ、男性同士のカップルの『日常』が描かれることで変わっていく部分は確かにある。」（藤本 2019: 150）と述べた。このような現在のBLの状況は、「BL≠Gay」という公式を発信するだけでなく、これまでは現実から逃避するコンテンツであったBLが現実に向かい合うコンテンツとなったと言えるだろう。

一方、BLの要素をドラマに取り込むのは、視聴率を上げ資本を得るためだという批判がある。しかし、視聴率を上げる一つの手段になるということは、ホモフォビア（同性愛嫌悪）が少なくなり、人々が無意識的にLGBTを受け入れるようになっていくと捉えられるのではないだろうか。このような現象からは、今後さらにこのような理解が加速する可能性があることが期待できる。

## 4 おわりに

本稿ではBLの新しい現象を紹介してきたが、これらの現象に関する社会学やカルチュラル・スタディーズなど観点からの理論的な説明は、筆者の今後の課題になる。BLの読者は必ずしもLGBTに触れるとは限らないが、少しずつLGBTに対する印象は変化していくかもしれ

ない。BL が異性愛の女性にとってファンタジーになりつつも、実際には現実社会の不平等を訴え、人々がそれに向き合うきっかけとなっている可能性が今回の分析から明らかになった。いつかドラマで描かれているような優しい世界において、性別や年齢、階層に関わらず、「愛」が存在し人々が幸せになれるという現実を筆者は期待している。

#### 【参考文献】

- 藤本由香里, 2019, 「『おっさんずラブ』という分岐点」 ジェームズ・ウェルカー編『BL が開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』 青土社, 131-150.
- ギタ・プラムディタ・プラメスワリ, 2019, 「不調和な情熱——インドネシアにおけるボーイズラブ・ファンのアイデンティティ交渉と LGBT に向けるまなざし」 ジェームズ・ウェルカー編『BL が開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』 青土社, 263-283.
- McLelland, Mark and Welker, James, 2015, "An Introduction to 'Boys Love' in Japan," *Mark McLelland, Kazumi Nagaike, Katsuhiko Suganuma, and James Welker eds., Boys Love Manga and Beyond: History, Culture, and Community in Japan*, Jackson: University Press of Mississippi, 3-20.
- McLelland, Mark, 2010, "The 'Beautiful Boy' in Japanese Girls' Manga," *Toni Johnson-Woods eds., Manga: An Anthology of Global and Cultural Perspectives*, New York: Continuum, 77-92.
- 溝口彰子, 2015 『BL 進化論——ボーイズラブが社会を動かす』 太田出版.
- ワン・ペイティ, 2019, 「抑圧か革命か——同性婚合法化運動に対する台湾の BL ファンコミュニティの反応」 ジェームズ・ウェルカー編『BL が開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』 青土社, 217-239.